



文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

Bunka Gakuen University

文化服装学院

Bunka Fashion College

文化ファッション大学院大学

Bunka Fashion Graduate University

文化外国語専門学校

Bunka Institute of Language

Title	アイヌの衣服に見る藍染め：その役割と象徴性 <研究ノート>
Author(s)	深田, 雅子
Citation	文化学園大学紀要. 服装学・造形学研究 46(2015-01) pp.75-80
Issue Date	2015-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10457/2269
Rights	

アイヌの衣服に見る藍染め

—その役割と象徴性—

Indigo Dyeing in Ainu Culture

—Role and Symbolism—

深田 雅子

Masako Fukata

要旨

現存するアイヌの衣服の多くには、アツシなどの植物衣や木綿衣の襟ぐり、袖口、裾周りに藍染めの木綿布が使われている。それらは内地で染めたもので、貴重だと言われている。本研究では、アイヌの衣服に使用された藍染めの木綿布に着目し、なぜ藍染めが多用されたのか、その染色方法と役割、象徴性について明らかにすることを目的とする。研究方法は文献調査と、北海道白老町、登別市、沙流郡二風谷において聞き取り調査を行った。これらの調査から、江戸時代、アイヌは和人と交易や労働の報酬として藍染めの木綿布を手に入るようになり、樹皮衣アツシの補強や、着物に刺繍を施すための土台として切伏せ（アップリケ）のように使用し、その刺繍には魔除けや家族の健康を願う様々な思いが込められていることがわかった。また、藍色そのものも除魔力を持つと考えられており、裾や袖口などの縁に細く切った藍染めの木綿布を縫い付け、悪い神が入らないようにした。布を染めた藍については、内地で染められたという考えのほかに、エゾタイセイ（蝦夷大青）で染めた可能性と、藍以外の草木で彼ら自身が染めた可能性があることがわかった。

●キーワード：アイヌ (Ainu) / 藍染め (indigo dye) / 生活文化 (living culture)

I. はじめに

アイヌの衣服には、外来衣、動物衣、植物衣、木綿衣があるが、植物衣、木綿衣には紺色の木綿布が多く使われており、襟ぐり、袖口、裾周りに紺色の木綿布が置かれ、その上に独特な刺繍が施されているもの、紺色の衣服に直接刺繍が施されているものなどがある。それらの布は藍染めであると思われ、和人と交易で得た藍染めの着物の古着を使用しており、大変貴重だと言われている。なぜアイヌの衣服に藍染めの木綿布が多用されたのか。アイヌは藍染めを行っていなかったのか。

そこで本研究では、アイヌの衣服や染色方法について述べている文献の調査のほか、白老、登別のアイヌの資料館、博物館の学芸員等への質問、アツシ織りなどアイヌの手仕事の文化が残る平取町二風谷で聞き取り調査を行った。これらの調査から、アイヌの衣服に見る藍染めについて、その染色方法と、役割、象徴性について考察する。

II. アイヌの衣服

アイヌは北海道、樺太、千島列島などに居住する民族

で、東北にも居住していた。それぞれ北海道アイヌ、樺太アイヌ、千島アイヌと呼ぶ。伝統的に狩猟・漁労・採集を主とする自然一体の生活様式をもち、吟詠形式の叙事詩ユーカラが伝わる。活発な交易を行い、和人と交易も自由に行ってきたが、1456年津軽の豪族安東氏が道南各地に12の館を設け、アイヌや和商人との交易や領域支配の拠点としたのち、和人とアイヌの対立は激化し、松前藩によって自由交易が制限され、和商人が各地での交易や漁業生産を請け負うようになった。アイヌは漁場で雇われ過酷な労働を強いられたり、対等な交易が行われていないこともあった。しかし、交易を通じ、和人はアイヌから干鮭や毛皮を、アイヌは和人から絹や木綿、鉄製品や漆器を得ていた。

アイヌの衣服には、外来衣、動物衣、植物衣、木綿衣がある。外来衣とは、サハリンとの交易を通じて北海道に入ってきた山丹服や蝦夷錦、本州からの陣羽織や打掛などである。動物衣とは、クマやキツネ、シカ、イヌ、ウサギなどの陸上動物やアザラシ、ラッコ、オットセイなどの海獣の皮を使ったもの、鮭、鱒の皮をはぎ合わせた魚皮衣、ワシ、タカなどの鳥の羽毛を使った鳥羽衣で

ある。植物衣とは、オヒョウの木の内皮を糸にして織ったアツシ（樹皮衣）と、イラクサの内皮の繊維で織ったレタルペ（草皮衣）である。レタルペは樺太アイヌの衣服である。木綿衣は地域によって文様や刺繍に違いがあり、チカ_カカ_カペ（黒や紺の太い布を置いて刺繍する）、カバラミ_ミ（木綿地に大きめの白い布を切り抜いて刺繍したもの）、ルウンペ（いろいろな古裂を細かく切って縫いつけたもの）、そして北海道全土にあったといわれるチヂリ（切伏せを置かず直接刺繍したもの）の4種類に分けられる。衣服に男女の区別はないが、男性の方が力強い模様であったり、体格に合わせて大きく作られた。またアイヌ語の色名は少なく、赤をフレ（hure）、白をレタル（retar）、黒をクンネ（kunne）、黄をシウニン（siwnin）という。茶も紅もフレであり、紫はクンネとなる。シウニンは黄、緑、青を含んでおり、色名の範囲は広い。紺と黒の区別はないといわれている。

これらアイヌの衣服の中で、藍染めの木綿布を使っている事例が多く見られるのが、樹皮衣のアツシ、木綿衣のチカ_カカ_カペ、カバラミ_ミ、ルウンペ、チヂリである。（図1）チヂリは藍染めの衣服に直接刺繍を施したものであるが、それ以外は藍染めの木綿布を「切伏せ」（アツプリケ）といって、衣服の上に布を置いてその上から刺繍を施している。衣服のほかにも脚絆（ホシ）や、手甲（テクンペ）、儀式などで使うはちまき（マトンブシ）などの装身具にも藍染めの木綿布が多く使われている。（図2）

Ⅲ. アイヌと藍染め

1. 交易、労働の報酬として

我が国における藍染めは、平安、奈良時代にはすでに行われていたと考えられており、東大寺正倉院には「纏縷」という東大寺の大仏開眼法要に使用した紐が残されている。室町時代には現在と同じような藍甕を使った染色方法が行われていたといわれている。江戸時代に入り、木綿の普及、さらに阿波の国（現在の徳島県）の蜂須賀氏が藩として藍作を奨励するなどし、各地に藍染めを行う紺屋が集まった紺屋町が形成された。特に日本橋中央通りから続く神田紺屋町は江戸時代から明治時代にかけて手拭や浴衣の一大生産地であり、「その年の流行は紺屋町に行けばわかる」といわれ、流行の発信地となっていた。このようにして、江戸時代は藍染めが庶民の着物をはじめ、暖簾や装身具、身の回りのあらゆるものを染めるのに使われ、やがてこれらの藍染めの衣類が交易品



図1 アイヌの着物（樹皮衣と木綿衣）
（阿寒湖アイヌコタン アイヌ生活記念館／著者撮影）



図2 藍染めの木綿布を使った装身具
（平取町立二風谷アイヌ文化博物館／著者撮影）

として、アイヌの元へもたらされたと考えられる。

アイヌの人々の間で伝えられてきた叙事詩ユーカラや口承文芸のなかには、アイヌと和人との交易の様子が登場している。

「和人の国へ交易船で交易に行きいろいろな食べ物とおいしい酒 それらの物を持って来るのでそれを持って帰って行くといいであろう。暫くの間 神々も寂しくしていたであろうのと、言うことで勇者達が交易に行き船いっぱいの良いみやげ神へのみやげを渡しにくれてそれを持って上がって来た。」（『余市物語』）
「主人が舟で交易に出かけますと、衣料やらたばこやら、女性の宝物やら、宝物に、刀剣に、行器（ほかい）でも、舟いっぱい積んで、運んで来ますので、私たちは着物にも何も不自由することはありませんでした。」（『女の墓標の話が入った昔話』）

当時はどのような着物の裂を得ていたのか。岡村吉右衛門の『アイヌの衣文化』によると、アイヌが使用した裂の種類は「中国、日本内地の紺、浅葱が初めとし、紅や紺（茜）、紅や紺（茜）、鬱金、萌葱、茶の無地染紺、絞り、極めて稀に室町時代の辻が花、板締、慶長裂、刺繍、錦類、縞、格子があり、木綿類には紺、緑、紅、茜、紫の無地類、中でも紺無地が最も多く、この外、

縞、格子類の地木綿」などがあげられている。また「手紡の地細工の染物には内地では残っていない裂が散見される」という。「現存する木綿の殆どは幕末から明治にかけての和物」で、「これらは凡て彼等に作り得ないもの」なので、kapar = 立派なもの、よく出来ているものとして扱われていた。

木綿布は当初交易の品として得ていたが、次第にアイヌが漁場で雇われ過酷な労働を強いられるようになり、労働の報酬へと変わった。彼らは、春はニシン・タラ・ノリ漁、夏は昆布・アワビ漁、秋はサケ漁、冬は山の猟を行った。ニシンは肥料の「鯨粕」として使われた。江戸時代に入り、日本で綿の栽培が盛んになると、木綿に染まり易い藍染めも広く行われるようになった。綿は水分と十分な鯨粕があれば栽培が可能であり、北前船が運んでくる鯨粕は高値で取引された。藍の栽培にも鯨粕が使われ、徳島の藍商は船に阿波藍を積んで江戸に行き、帰りは鯨粕などの肥料を大量に買い付けて戻ってきた。この鯨粕の需要拡大もあり、アイヌは和人の場所請負人によって、漁場で奴隷的に働かされるようになった。アイヌが受けた過酷な労働の様子について、松浦武四郎は『近世蝦夷人物誌 初編 巻の下』「25 クワレンキの困窮」で記録しており、「一日の飯米と云えば僅か一合八勺ばかりの椀に玄米1杯を与え、其を運上屋に残り飯のある時は其飯を粥にのぼし、是を一日三椀宛遣こして責遣うまま、幼き者やまた老いたるものは何も喰することもなり難く……皆三十歳より四十歳前後にて病を受けて死し、子供も七、八歳まで内必ず飢と寒との為めに死し」と書いている。幼児や老人は古着一枚すら手に入れることが出来なかった。

2. 誰が染めたのか

以上のように、アイヌは過酷な労働を強いられながらも紺色の木綿布を得てきたが、北海道に藍染めはなかったのだろうか。白老と二風谷で、次のように聞いた。

「江戸時代の早くから、布が交易や労働の報酬として手に入るようになった。それまでは木の皮で織ったり動物の皮で織ったりしていた。布が交易や労働の報酬として手に入るようになると、織らなくて良い。江戸時代は日本人も草木染めだったので、主に藍染めや紺を使うようになった。」(二風谷)「この辺に藍はない。昔は泥染や黒っぽい線、木の皮で染めた。黄色、赤はなかった。」(二風谷)「ここではほとんど藍染めをしない。すでに染まっている布や糸を使ったと思われる

る。ほとんどの着物が内地からもらった古着の端切れを組み合わせている。木綿は大変高価だったので、いつも着ているわけではなく、祭りの時などだけだった。」(白老)

以上のように、アイヌ自身では染めておらず、和人の交易で得たという回答のみ得られた。しかし、アイヌの生活や染色について書かれた文献をあたってみると、そのほかに二つの可能性があることがわかった。一つ目は「エゾタイセイ(蝦夷大青)で染めた可能性」と、二つ目は「藍以外の草木で染めた可能性」である。「内地で染めた可能性」を含め、これら三つの可能性について考察していきたい。

(1) 内地で染めた可能性

日本で行われていたのは、蓼藍という藍草を使った方法である。藍の葉を発酵・熟成させた葉を搗き固めて藍玉にし、これを藍甕という地中に埋まった甕の中に入れ、灰汁やふすまも入れ発酵させる。甕は30℃程度で一定に保たなければ発酵が止まってしまう。江戸時代、安政4年に蝦夷御用御雇として蝦夷地を踏査した松浦武四郎の『天塩日誌』には、「往来より松前函館の他、寒気強く紺屋なき故」とあり、北海道には寒さのため紺屋がほとんどなかったと考えられる。以前青森県弘前市にある川崎染工場を訪ねたとき、この店が北限だと聞いた。訪ねたのは一月で、染料が入っている藍甕には毛布が掛けられていた。現在、北海道の伊達市が藍の生産地として有名だが、伊達市の藍は明治の北海道開拓時代に、徳島県からの団体が入地し発展した。これは北海道に自生する藍ではなく、徳島から持ち込んだ蓼藍である。よって北海道では藍染めは行われておらず、内地で染めた布がもたらされたと考えられる。

(2) エゾタイセイ(蝦夷大青)で染めた可能性

エゾタイセイとはアブラナ科の二年草で、北海道で採れる大青なので「蝦夷大青」または「北海道藍」と呼ばれている。染織雑誌『月刊染織a』1981年8月号では、「エゾタイセイ、かつてアイヌがこれを用いて藍染めをし、いまは滅び去った北辺の藍草と言いつたえられている。……あぶらな科タイセイ属の越年草で、往時ヨーロッパで栽培されたウォード(ホソバタイセイ)と同種」とあり、礼文島で撮影されたエゾタイセイの写真が掲載されている。後藤捷一氏も『三木文庫所蔵庶民史料目録第二輯』の天然藍の種類の紹介で、「ウォード 西

洋菘藍 *Isatis tinctoria* L.] の図説において、「えぞたいせい（牧野新日本植物図鑑）」と紹介し、染織文化研究家の上村六郎氏は『シエイキナ（アイヌの藍草）考』で、「アイヌ部落の附近には、必ずセタアタネ即ち、蝦夷大青が生えている」と書いている。さらに松浦武四郎の『天塩日誌』には、「藍にはシエイキナとて、深い山の陰地に生じ、長二尺餘にて、藍の葉の如くにて尖り、秋末に白花を開く、是にて染める」とある。

(3) 藍以外の草木で染めた可能性

藍以外の草木では、串原正峰の『夷諺俗話』において「蝦夷人の着するアツシは、薄紫に染めたる有。フラシノは和名浜松というものなり。是を口中にてかみ崩し、アツシを染めたるなりと云り。色合至て見事にて、やはり江戸紫のごとし。」フラシノはクラシノ（黒いもの）が訛った呼び方で、ガンコウランのことである。更科源蔵、更科光氏の『コタン生物記 I 樹木・雑草篇』ではアオダモの「皮を水に入れておくと青くなるので、それを厚司を織るオヒョウの皮の繊維につけて青く染めるのにも用いた。」とある。そのほか西川北洋の『天然生活と資源の活用 アイヌ風俗繪巻』ではオヒョウの糸を菖蒲の花で染めて縞を織る事もあると記されているが、その具体的な染色方法を記した文献は残っておらず、河野廣道氏は『蝦夷往来 第三号』で、「アイヌの織物染色法を記述して居る文献は甚だ少く特に明治以後のアイヌに関する本には殆ど参考になるものがない。」と述べている。

以上のように、アイヌが彼等の土地に自生する草木を用いて紺色を染めていたのかははっきりしておらず、すべてが内地の藍で染めたものとは断言できない。しかし、日本の藍以外にもアイヌ独自の染色方法があった可能性があるといえる。

Ⅲ. 藍染めの役割と象徴性

日本で藍が広まった理由として、「木綿に染まり易いこと」「堅牢であること」「防虫効果があること」などがあげられるが、アイヌが藍染めを使った理由は何か。

一つ目は「補強のため」である。樹皮で織られたアツシには、ほつれないよう補強のために藍染めの木綿布が使用された。また「丈夫であること」と「加工してからの持ちのよさ」に加えて、アイヌにとっては衣装の土台にしたときに、糸と置き布がどんなものであれ「美しく」仕上がるのが大きな理由」と聞いた。

二つ目は「刺繍を施すため」である。針仕事は女性の仕事であり、メノコ（女の子、娘）ネップキと呼ばれる。随筆家茅辺かろう氏は四辻一郎編『アイヌの文様』のなかで、アツシについて「木の内皮で織られたこの伝統的なアイヌの織物は、針を自在に操るのに不向きな素材であるため、じかに刺繍されることはなかったようである」と述べている。つまり衣服に刺繍するために藍染めの木綿布を使用した。また同時に、刺繍することで、貴重だった木綿布を長持ちさせるためでもあった。また岡村吉右衛門の『アイヌの衣文化』によると、晴れ着は美しいだけでなく、美しく作ることによって魂を持つものと考えられている。また刺繍によって魂を持った着物は、古くなると「衣服としての役目を果たしたものであり、それを着た人間の務めとして、着物の魂送りをし、神の国に還さねばならない」という考えを持っている。

三つ目は「魔除け」である。岡村吉右衛門によると、うなじと穴は「急所であり、霊の出入りする大切な口である」と考えられていた。とくに「背紋は最も重要な場所」で、「うなじ下の霊の出入りする急所を保護する役目を担う模様である。和服で背紋をつけたり、産着の魂緒と同一の目的を持つもの」という。これは母親が子供の着物の背中に縫い付ける「背守り」と似ている。「背守り」は、背後から魔が忍び込まないようにするために飾りを縫い付けたもので、子供の健やかな成長を願う母親の気持ちが込められている。アイヌの文様には、モレウ文（図3）とアイウシという括弧文（図4）があり、モレウ文はうずまき文様で命あるものと考え、括弧文は{|} に似ていることから呼ばれ、刺のある文様で、アイヌ語でアイウシという。アイ（刺）ウシ（矢）で、神の矢の意味で、悪魔を防ぐ。この刺繍の意味について、二風谷の民芸店で興味深い話を聞いた。

「模様全体が魔除けの意味を持っている。病気にならないように、みんなが健康で過ごせよように、またチェーンステッチで繋がりを持つという意味で代々繋がっていくという意味もある。自然の文様、山があり、花があり、フクロウの目のイメージがあり、背中に渦巻き模様が入るとフクロウの目という意味がある。自分は前を見ているけど、後ろにも目を持っている。これがそうだというのではない。今はこれだけ刺繍が入っているが、昔糸がないときは、襟ぐり、袖口、裾まわりだけ魔が入らないようにしたのが、文様の始まりといわれている。」

さらに、文様の始まりについては、

「もし畑に行って子供を寝かせる場合にもその周りを魔除けのために縄を丸く巻く。このような風習が昔からあったから、着物の文様も縄を交差させて出来た」と聞いた。また、刺繍をするための針も貴重で、金属文化を持たなかったので、木綿と同様で山丹、和人との交易や出稼労働の報酬として入手した。「針や糸がなかった頃は鹿の骨で針をつくった」、糸は「冬に鹿が獲れたら取っておく。それを編んで糸をつくる」と聞いた。また「チシポ」という一本の針を入れるための木彫りの針入れがあり、アイヌの女性が胸元に下げ身につけていた。(図5)

切伏せをし、その上に刺繍施すことによる「魔除け」のほかに、色そのものが持つ「徐魔力」もある。岡村吉右衛門によると、「黒い裂は徐魔力があると信じられており、裾、袖口、などの縁に廻す」理由は、「我等の着る着物の間から悪い神が入ることを我等嫌う為」であり「喪服以外、必ず黒い裂であった」という。小衿に白木綿をつけるのは死装束になる。アイヌの人々の考えでは、病気をもたらすパコルカムイという神様がいて、この神が住む村をクンネコタン（黒い村）と呼び、ここに住むものはみんな黒だといわれる。なぜ病気の神様の黒を身につけるのか。病気の神様は奇麗なものを好むといわれており、病魔に嫌われるよう赤子にボロを着させたり、汚い名前を着けたりした。このように、着物に黒を使ったのも、パコルカムイを寄せ付けないためかもしれない。

IV. まとめ

今回の調査で、藍染めの木綿布が江戸時代頃からアイヌのもとへ渡るようになり、樹皮衣アツシの補強や、刺繍を施すための土台としての役割を担っていたことがわかった。またその刺繍には魔除けや様々な願いが込められ、藍色（黒）そのものにも除魔力を持つと考えられていることがわかった。しかし、藍染めに使った染料について文献と証言が異なっていること、エゾタイセイやその他の草木染めについての証言を得ることができなかった。

また、紺色の木綿布を切伏せとして縫い付ける意味には、東北地方の刺し子のように、保温の意味も含んでいるのではないかと考える。『地方史研究』39巻の中で、伊藤博満の『北東北庶民とアイヌの接触による生活文化—「もの」をめぐる民俗学的研究の可能性を考えて』によると、津軽半島むつ湾沿いの村落で背中に明紺色の麻布を用い背中を太い糸であや状に刺した刺子風のアツシ

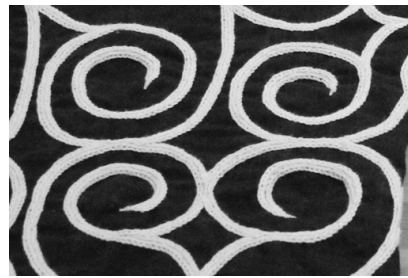


図3 アイヌの刺繍（モレウ文）
(平取町立二風谷アイヌ文化博物館／著者撮影)



図4 モレウ文と括弧文（アイウシ）を組み合わせた文様
(阿寒湖アイヌコタン アイヌ生活記念館／著者撮影)



図5 チシポ（針入れ）

が登場している。これは出稼ぎに来ていた下北半島の人々が持ち帰ったアツシ、または彼等が作ったアツシであると考えられており、下北半島の人々はアツシに補強と保温の役割をもつ刺子を施している。同様な考えがアイヌにもあったかもしれない。

今回の調査では道南地域が中心になったが、アイヌ文化の残る地域は広範囲に渡っており、今後もさらに地域を広げて調べていきたい。

参考文献

- 『月刊染織 a 1981 年 8 月号』株式会社染織と生活社 昭和 56 年 P4-5
- 『蝦夷往来 第三号』代田茂樹 昭和 6 年 P66-73
- 『コタン生物記 I 樹木・雑草篇』更科源藏、更科 光 昭和 51 年 P11-20
- 『アイヌ 海浜と水辺の民』大塚和義 平成 3 年 P24-32, P49-72
- 『アイヌの文様』四辻一郎編 昭和 56 年
- 『ポン カンピソ 2』北海道立アイヌ民族文化研究センター 平成 8 年 P6-21
- 『アイヌの衣文化』岡村吉右衛門 昭和 54 年 P146-153, 191-201, 224-233
- 札幌大学付属総合研究所 研究叢書 1 『伝承から探るアイヌの歴史』本田優子 平成 22 年 P272, 280
- 『菅江真澄とアイヌ』堺 比呂志 平成 9 年 P253-264
- 『ユーカーラの里 修補再版』山田秀三 昭和 41 年初版発行 平成 22 年改訂 11 版
- 『地方史研究』39 卷 P35-45 『北東北庶民とアイヌの接触による生活文化—「もの」をめぐる民俗学的研究の可能性を考えて』伊藤博満 平成 1 年
- 『アイヌ人物誌』松浦武四郎 平成 14 年
- 『天然生活と資源の活用 アイヌ風俗繪巻』西川北洋 昭和 17 年 P17
- 『三木文庫所蔵庶民史料目録第二輯』明石彌三郎 昭和 31 年 P158-159